

第7回FDセミナー報告

理工学研究科電気電子工学専攻・教授
渡部 泰明

第7回（平成20年度第1回）TMU FDセミナーが、FD委員会主催で平成20年10月2日（木）14：00から南大沢キャンパス6号館101室において開催された。

今回のセミナーのテーマは「学士課程教育」の学習成果を考える”であり、司会進行はFD委員 萩原裕子教授が担当し、外部講師による基調講演と基礎教育部会報告という構成で実施された。

講演に先立ち、上野淳基礎教育センター長・FD委員会委員長より、挨拶および今回のテーマに関連して中教審の「学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）」の概要、そして本セミナーの学内Web動画発信について紹介が行われた。引き続き西澤潤一学長より挨拶があり、“使於四方，不辱君命。可謂士矣。（四方に遣いして君命を辱めず。士と謂うべし）”という論語の一節から、学士の“士”の字には“言われたことを要求どおりに実行できる力”という意味があり、さらに現在の大学には、基礎を理解し想像力ある学士を輩出することが期待されているとお話があった。

基調講演は、神戸大学 大学教育推進機構教授 川嶋太津夫先生による「近年の改革動向—『学士力』を中心に」であった。川嶋先生は、中教審大学分科会の学士課程の在り方に関する小委員会委員として上述の「審議のまとめ」に携わられた専門家である。今回は、“近年の改革動向 —「学士力」を中心に—”と題してご講演頂いた。以下に講演概要を記す。

大学設置基準の趣旨にあるように、大学には“(1)どういう知識を持って、(2)何を理解し、(3)何ができるようになって卒業させるのか”ということ具体的に考え、教育を行うことが国際的にも求められている。講義を例に取れば、15回の講義が終わった後、“どういう事が理解できるようになったか、どういう事が分かっているか”という具体的な形で学生に到達目標（=学士力）を与えるということが求められているのである。

このような要求の背景には、これまでの単なる知識習得から、持っている知識を活用し、新しい知識を生み出していくという“知識”の意味の変化と、終身雇用制度の崩壊や多様な就業パターンといった流動化する労働市場に対応し、大学教育を通しての知的インフラ・持続的就業力の修得が求められているという社会状況がある。また、大学のユニバーサル化（全入）における“これまで

通りの出口管理（全出）”に対する疑念や、教育投資に見合った能力が身に付いていないという社会的懸念もある。さらに、将来の目標を持たず、講義時間以外は勉強しない、自分独自の勉強もしないといった学生の増加に伴う高等教育のパラダイムの転換も、学士力重視へのシフトの背景となっている。

これまで大学改革の経緯としては、91年の「大綱化」と「学士の学位化」に始まり、97年の「21世紀答申」、05年の「将来像答申」と徐々に具体性を持った答申が提出されてきた。本年9月には「中長期的な大学教育の在り方」として、(1)社会や学生からの多様なニーズに対応する大学制度及びその教育の在り方について（学生本位の視点、学位プログラム、質保証システムなど）、(2)グローバル化の進展の中での大学教員の在り方について（大学教育の国際的評価への対応など）、(3)人口減少期における我が国の大学の全体像について、という3本の柱に沿って種々の提案がなされた。答申では、「学士＝学位＝世界共通の“知識・能力の証明”であり標準性が必要とされるものとされ、教育体制も学位を授与する課程（プログラム）としての教育へと転換が求められている。また、大学のユニバーサル化や大学院教育の拡大によって、学士課程教育の役割が変わってきていることも挙げられている。大綱化後の大学改革においても教育プログラムとしての学士課程は実現しておらず、“学士”は出すが旧来の学部教育の域を出ていなかった。今回の提言では、学士課程の“再構築”ではなく人材育成のプログラムという観点からの教育プログラム“構築”が求められている。そのためには、各大学において学位を与える人材像を明瞭化し、その知識と能力を明確に設定しておく必要がある。このような教育プログラムを経ることで得られた“学位”が保証する知識や能力のことを“学士力”ということになる。

上述の教育プログラムの背後には“アウトカムを重視した教育”という考え方がある。これまでの大学教育は、大学・教員中心で“何を教えたのか”というものであったが、“何ができるようになって欲しいのか”という学生中心の観点から教育の在り方を考えるのがアウトカム重視の教育である。すなわち、(1)期待される学習効果を明確化し、(2)教育・学習の戦略を考え、(3)アセスメントを行うこと、の3点を整合性を持って実施するこ

とが、この考え方の基本である。

これまでの一般の大学では主として専門分野（アカデミック）の知識を獲得させるという視点で教育が営まれてきた。他方、医学・看護など職業に直結した分野では、それぞれの職業で必要とされる知識や能力を獲得させるという教育が行われてきた。これからの学士課程教育では、アカデミックな場面、職業的な場面双方に共通に求められている“汎用的な力（ジェネリックスキル）”の育成がアウトカムとして求められている。この“力”は、(1)社会的（チームワーク、リーダーシップ、市民義務感など）、(2)知的（分析、想像力など）、(3)コミュニケーション（自分の考えをチームに伝える）に3つの能力に分類することができ、諸外国においても共通的に学士教育に求められている要素となっている。

このアウトカムを重視した学士課程をプログラム化するには、(1)人材育成目標の明確化（どのような人間を育成するのか）、(2)学習成果の設定（卒業時に身につけた能力）、(3)学習・教育活動の工夫改善（身につけさせる方法）、(4)適切・厳格なアセスメント、の4項目を整合性を持って構築する必要がある。また、教育の質を保証するためには(1)ディプロマポリシー（卒業時の知識・能力＝ラーニング・アウトカムズ）、(2)カリキュラムポリシー（教育戦略）、(3)アドミッションポリシー（入学者に求める知識・能力）、を一貫性を持って運用することが重要である。カリキュラム構築においては、“どの授業でどのような「力」（ラーニング・アウトカム）が身に付くのか”という観点から体系的に構築し、組織的に取り組むことが必要である。

ラーニング・アウトカムを習得させるには、従来の教授法・学習法を改善・転換していく必要がある。現在では、学びの質は、指導する教員や学生の資質ではなく“どれだけ学生自身がアクティブに学習活動を行ったか”として評価されるようになってきている。また、学生のユニバーサル化（大衆化）に伴い、これまでのエリート（入学時から高い知的能力を持つ）を対象とした教育方法は通用しなくなり、大学において高度な知的活動・能力（最終的には一般化、理論化できる能力）を身につけさせる教授法・教育体系が必要となっている。一方的に教員の話の聞くだけ、すなわち「スポーツ観戦」では“学び”にならず、実際に講義に参加するような能動的学習が必要であり、そのためには教授法・教育方法の改善が必須となる。具体的に最も教育効果が高い教授法は、人に教えること・実際にやってみることである。ラーニング・アウトカムズの習得の判断は、基本的に絶対評価であり、そのためには評価基準を明確にする必要がある。明確な成績評価方法の例として、宿題や中間テストなど

それぞれの項目に評価の重み付けを行う方法がある。併せて各項目により習得できる能力を明示しておく必要もある。

最後に、これからの大学に必要とされているのは教育の質の直接検証であり、さらにその成果の目に見える形で社会への発信である。すなわち大学における教育研究の結果として、学生が身につけた知識やスキル、態度や価値観、学生の学習と成長、成功などを証拠を挙げて示していくことが求められているのである。また個々の講義は、教員個人の財産ではなく、それが大学全体の教育システムの一部を担っているということ、すなわち大学の教育目標の中でのその講義の位置づけを担当教員が常に意識することが必要なのである。

講演の後、多数の質問があり、活発な討論が行われた。

休憩を挟んで、基礎教育部会長の保坂靖人先生から“首都大学東京の共通教育改革”と題し報告があった。初めに首都大における共通教育の概略として、共通教育科目のカテゴリと特徴が紹介された。続いて履修の流れと総単位数に対する都市教養科目の割合、健康福祉学部学生や経営システムデザインコースの履修上の問題点などが示された。

現在、都市教養プログラムはテーマを設定し系が異なる分野から4科目以上、合計14単位を履修しなければならない。これまで履修の便を考え時間割が組まれているが、実際には言語科目や学部が必修指定する科目があるため、開講科目は多数あるものの履修の自由度が低いという事例が報告された。

次に教育検討部会などでまとめられた都市教養プログラムの問題点（テーマの縛り、受講者数、履修科目指定など）とその解決案が示された。また共通科目の名称が分かりにくい点（共通基礎教養科目）が問題点として挙げられた。

最後にこれからの課題として、共通教育の理念の明確化とそれに伴うカリキュラム作り、学士教育・初年度教育の方法、そしてこれらを議論するための体制整備が必要であることが示された。また障がいのある学生の受け入れ体制、インターンシップの位置づけなどこれまで先送りされていた問題点が示された。

報告の後、セミナー全体を通しての質疑討論が行われ、活発な意見交換が行われた。

今回のセミナーは履修相談日と重なったため2時間という制限があったが、川嶋先生、保坂先生の分かりやすいお話で大変有意義なセミナーとなった。講師の先生方に心より御礼申し上げたい。本セミナーを通して“学士

力”の定義や意義、優れた学士輩出のために取り組むべき課題、現状の共通教育科目の問題点などを理解・再認識することができたと思う。学士力をコアにした学部教育・共通教育の構築には障壁が多々あるが、“社会に役立つ人材育成”は、今日の大学の使命であり、臆することなく実現に向けて努力していきたい。